オレアタシ

で買おう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オレアタシ

【Ｎコード】
Ｎ４４９５Ｆ

【作者名】
で買おう

【あらすじ】
人よりだいぶやんちゃな高校一年生の北村瑞希はある日突然体が女に変わってしまう。焦る瑞希、微妙な反応の友人達。瑞希とその不愉快な仲間達のなんかアレな物語。修正しようとしたらしくじって３話目まできえたんでやる気なくし中。更新クッソ遅くなります。

プロローグ

そのまったく意味分からん変化は突然訪れた。

最初は信じられなかった。いや、ぶっちゃけ今でも信じられれん。

小説やマンガでしか見たことないような現象が今、自分の身に起こってる。

人よりちょびっとだけやんちゃな男子高校生であったはずの俺が、

掌底高等学校なんていう普通の私立高校に通っている俺が、

影で女の子に

「瑞希クンってカッコよくない！？」

「カッコいいよね！でもなんか怖そ～」とか言われてる俺が！

ホントは怖いとか全然そんなことない、捨て猫とか放っておけないタイプのこの俺が！

ある日突然

女になった

プロローグ（後書き）

やり直します…いやホント、迷惑かけてスンマッセン！！

どう見ても美少女です本当にありがとうございました

「兄貴、起きろ。昨日俺のタバコパクったろ」
コンコンコン――

俺、北村　瑞希はその日、弟の祐希の声で目を覚ました。眠い目をこすりながら枕元で充電していた携帯を手にとり今の時刻を確認すると

７：２４

ふざけんなもうちょっと寝かせろ。

「せめて部屋の鍵開けろ、タバコ返せ」
コンコンコンコン――

うるさい、いいじゃんタバコくらい…俺は無視して二度寝することに決めた。なんで学校休みの日にこんな時間に起きなきゃいけねんだよ。そう思いながら寝返りをうつとサラサラと長い髪が視界に入ってきた。

……？

不思議に思いながら頭を触ってみると、なんかすごい髪長い…俺の髪はこんなに長くなかった筈だ、まさか一夜でこんだけ伸びたのか……？

「兄貴ー、タバコー」

「うるせえ！それどころじゃねんだよ！」
怒鳴ってみてびっくり、声が変。なんか高い。
「……今の声って兄貴か…？」
祐希にも変な声に聞こえたらしい、まぁいいや。とりあえず眠気覚めちゃったし、ベッドから降りドアの鍵を開けてやる。
「……誰アンタ？」
失礼な弟だ、実の兄に向かって誰？なんて聞くなよ。
あー、それよりタバコタバコっと…なんか知らんが固まってる祐希を尻目に俺は昨日貰った（パクった）タバコを探す。
あれ？どこに置いたっけ？ゴチャゴチャ色んなものが乗っているテーブルの上を探しているとき、ふと近くに置いてある鏡を見てビビった。
鏡に映る自分を見てビビった。
だって、俺女の子だもの。
どうみても俺美少女だもの。

「……だ、誰コレ？」
「いや知らないよ、つかホント誰だよ」
やっとの思いで言葉を発した俺に弟は冷たかった。
つーか

「コレ俺ぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？？」

俺どうなるんだろ…

どう見ても美少女です本当にありがとうございました（後書き）

読んでくれてありがとうございます。先のことなんて考えてません。適当な感じで行きます。誤字脱字が酷かったり文がおかしかったり、色々駄目なところがありますが、もしよければこれからも読んでください。頑張りますので……ね？

先の展開とか考えてないや、どうしよう

前回、女の姿で弟と対面した俺。

俺は今必死になって自分が瑞希であることを祐希に伝えようとしてるんだけど……

「――だから朝起きたら女になってたんだって！」

「いや、そんなこと言われましてもねぇ」

「ホントに俺が瑞希なんだって！」

「あっわかった！兄貴の彼女とか！？こんな可愛い子がねぇ…いいなぁ兄貴、殺そ」

「だぁぁかぁぁらぁぁ！俺が瑞希なんだってばーーー！！あと殺すなーーーー！！！」

全然伝わらない。

さっきからずっとこんな調子なのだ。俺がどうすれば信じてもらえるのか考えていると――

「うるせえぞコラァァア！」

親父が乱入してきた。俺と祐希の騒いでいた声で起こされたらしくやたら不機嫌である。

最悪だ。

さらに面倒くさい状況……

「…誰だこの子、祐希の彼女か？」

あれ？機嫌なおってる！切替早っ！

「いや、この人自分が瑞希だってさっきから言ってるんだけど、親父どう思う？」

「マジなんだ！朝起きたらなんか俺、女になってて…」

「……瑞希ぃ？ダハハッありえん。こんな可愛いのが瑞希なわけないだろ」

それがありえるの！俺それで今困ってんの！

「だよなぁ」

お前も納得してんじゃねぇよ

「そういやぁ瑞希はどうした」

ここにいるよ

「兄貴は俺がきた時からいなかったぞ」

あぁ、もう

……俺が頑張って祐希に説明していたのは無駄だったのか、今の祐希の言葉でよぉく分かった。もういい、口で言ってもわからん奴らにはこれしかあるまい……

「俺が瑞希だっつってんだろがぁぁぁあ！！！」

言いながら俺は祐希の太もも目掛けて全力で足を振り下ろす。きれいにすねが祐希の太ももに入る。

「な、何をするだーーっ！！」

なんか叫びながら床で転がりまくる祐希、ざまぁ。

次は親父だ！親父はポカーンとした顔で転がる祐希を見ている、チャンス！俺は祐希の時と同じように素早くローキックを仕掛けるが、親父はすぐに気付きとっさに片足をあげ防御の体制をとりやがった。

ゴッ

俺のすねと親父の膝がごっつんこ。

「ギャーーーーー！！」

痛いなんてもんじゃない！ヤバい！俺はすねをおさえて床を転げ回る。ちくしょー！

親父はやれやれみたいな感じでこっちに歩いてくる。がしかし、その途中で……

ガッ

親父はテーブルの足に小指をぶつけた。

「うぼあーーーーーっ！！」

親父も小指をおさえ床を転げ回る。
俺を含めた三人が足をおさえ声にならない声をあげながら床で転げまくっている…。
これって端から見れば結構シュールな光景なんじゃね…？
俺は痛がりながらもちょっとそんなことを思った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「わけわからん展開だったね」
もぐもぐ
「まぁいいじゃんか、祐希」「…そうだね、あっ親父、マヨネーズ取って」
もぐもぐ
「いつもかけ過ぎなんだよテメー太んぞ」
「うるさい、俺太らないし」
むぐむぐ
足の痛みから立ち直った俺たちは『あー、腹減ったしなんか食おうぜ』と言う親父のちょっとズレた意見にとりあえず同意し、今は三

人で食事中。こうしていると何時もとなんらかわらんような気がするな…つーか二人ともホントいつもどおりだなぁ――

ピンポーン…

だれか来た、誰だ？

「祐希、行ってきてー」

「祐希、行ってこーい」

祐希は俺と親父の声に、ヤレヤレみたいな顔をして『よっこらセックス』とか言いながら立ち上がり玄関に向かった…なんていうか、オッサンくさい。

すぐに祐希は戻ってきた。客といっしょに…

あーまた面倒な説明をしなきゃならんのかなぁ。俺は溜め息をついて客である森下　千早に声をかける。

「よう、千早」

「いや、誰？」

「俺は瑞希だ」

「は？瑞希は男……」

「だから、そのーこれは何というか…」

説明するのが面倒になった俺はとりあえず

「イメチェンしたんだ」

と言っておいた。千早は『なるほどイメチェンか、納得！』とか言ってる、納得したのか…すげーな

とここで祐希が会話に入ってくる。

「千早、それなに？」

祐希が言いながら指差したのは千早に引きずられている見知らぬおっさん。実は俺も気になってた。

「あぁこのハゲか？」

うんうんと頷く俺と祐希、親父は興味なさそうな目で千早の足元にいるハゲを見ていた。

「このハゲこの家の窓からコソコソ入ろうとしてたからなんとなく仕留めといた、もしかして知り合いだったか？」

「いや、そんなハゲ知らん。祐希知ってる？」

「知らない、親父は？」

「知らん」

誰の知り合いでもない、泥棒か何かかな？

「……んふぅ…ぅん…？」

なんか気持ち悪い声を出しながら、気を失っていたハゲはちょうどいいタイミングで目を覚ました。

「オジサン誰？」

俺はとりあえずしゃがんでハゲの顔を見ながら聞いてみる。

「ん？あぁ、おっちゃんは妖精だよ！！」

ハゲ散らかったオッサンは大きな声でそう言った

どうすんだよこの小説……

先の展開とか考えてないや、どうしよう（後書き）

ノリで妖精とか出しちゃったけどどうしよう…。頑張ります

これってどんな話なんだか

千早が引き摺ってきたハゲのオッサン、なんかホントに妖精らしい。だってオッサンが『証拠見せるから！』とか言ったすぐ後にオッサンの背中から透明な羽みたいなのが生えて空飛んでたもん。ハゲたオッサンが空飛ぶ姿は普通に気持ち悪かったよ。

で、まぁ今そのオッサンの話を聞いてるんだけど――

『おっちゃんね、自分が女だったらどんな感じになるか気になって【短時間性別が変わる魔法】を作ったんだ。だけどそれを自分にかける直前にくしゃみが出ちゃってさ～、その魔法はどっかに飛んでいって、なんか瑞希クンにかかったみたい。アハハ！』

オッサン以外全員ちょっと引いている。

俺も引いていたが今の話で少し気になった事を聞いてみた。

「なぁ、短時間ってどれくらい？」

『5分位だよ』

「もう目ぇ覚ましてから一時間はたってるんですけど…？」

『いやーなんか失敗しちゃったみたいでね、瑞希クン多分ずっとそのままだと思うよ。アハハ！』

そのまま……女のまま……？

えー、まじかよー……ハハ

俺は気を失った。

どうも、祐希です。ここからは俺視点だよ。

それにしても妖精のオッサンの話を聞く限り本当にあの子が瑞希みたいだ。
やったね、姉ちゃんが出来たよ。すげー可愛いよ。

「グッジョブだよオッサン」

嬉しかったので褒めておいた。
親父も嬉しそうに『娘ができたよ母さん』とか言ってる。
言い忘れてたけど母さんは俺が生まれてすぐ死んだ。今は親父と俺と兄貴の三人で暮らし…あぁ、兄貴じゃなくて姉ちゃんか。
今は親父と俺と姉ちゃんの三人で暮らしてる。

ちなみに千早は幼なじみ。男の幼なじみって微妙だよね…幼なじみ

は女の子がよかった。まぁ姉ちゃんが出来たからいいけど。

まぁそれはいいとして…

「妖精のオッサンの話をまとめると…オッサンの作った魔法で兄貴は女になった、で、兄貴は元に戻れそうもないと…そうゆうことだよね？」

「まぁそうです！だから責任もってサポートするよ！」

「「……サポートぉ？」」

親父と千早が声を揃えて聞き返す。ていうか何で2人とも酒飲んでんだ……あぁ、馬鹿だからか。

「そう！サポート！ということでカモン！マイワイフ！！」

ガラ

「呼んだかい！？」

妖精のオッサンがなんか言い終わると同時に窓から入ってきたオバサン…オッサンの嫁さんか、ていうか玄関からこいよ。

「「誰だババアてめーこのやろー！」」

親父と千早はそう言い終わると同時にオバサンに殴られていた。しゃもじで。しかも気失ってるし……

「初対面の人にむかってなんて事言うのあんたたち！失礼だね！全

くあんたたちは！」
俺は色々とオバサンに言いたい事もあったが止めておいた。しゃもじで殴られんのやだし…
そうしているうちにオバサンは姉ちゃんを抱きかかえ『ちょっと待ってな！』とか言いながら隣の部屋へ……

しばらくして、オバサンは満面の笑みで戻ってきた。オバサンの後ろには姉ちゃん、なんか泣いてる。可愛い。じゃなくて…
「どうしたんだよ姉ちゃん？」
「ブラジャーとかね…その他色々教えられたよ…もうやだ…シクシク」
「なるほどね…つーかその手にいっぱい持ってる女物の服や下着は？」
「オバチャンが魔法で出した。全部俺にちょうどいいサイズ」
「……なるほどね」
「ありがとうなマイワイフ！」
急に叫ぶなよオッサン、ちょっとビックリしたじゃん
「じゃああたしゃ先に帰るからね！瑞希ちゃんまたね！」
来たときからずっとテンションが高いままオバサンは帰っていった。
窓から。
いや、だから玄関から帰れよ。

「こうなったら俺は女として生きてやるぁあ！」
なんかヤケクソって感じだな姉ちゃん…っていうか
「なんでオッサンはまだいるんだ？」
「何でって君たち学校の事とか忘れてるでしょ」
「「…あ」」
俺と姉ちゃんの声が被った…すっかり忘れてた
「どうすんの姉ちゃん？」
「どうしようもない」
「だからおっちゃんがもう手を打っておいたから、その説明の為にね」
「さすがー」
「で、その手ってどんなん？」
「転入生として入る。もうその辺の手続きとか済ませたから」
「姉ちゃんが転入生として入る？」
「今までの俺は？」

「ブラジル行った事にした」

「「……」」

「北村　瑞希君はブラジル行って北村　瑞希ちゃんが転入してきましたって事」

「無理やりすぎない？」

「……」

「まぁ大丈夫だって！おっちゃんが言うんだから間違いない！」

なんか適当な感じで瑞希は女として学校に通うことになったのだった。

これってどんな話なんだか（後書き）

次回は学校。ほんとなんかグダグダですいませんえん……すみませんでした。

学校って行くまではタルいけど行ったら楽しいよね

胸がある、Ｂくらいだと思う。

髪はサラサラでケツが隠れる位長い。

身長は１５０センチ位か。

顔は小さくて可愛くて、街を歩けばすれ違った奴全員が振り向いてガン見してしまうだろう。

っとまぁ、今の俺はこんな感じなのだ。元々男の俺は朝起きたら美少女になっていた。

で、今日は女の姿で初登校してきたんだけど、みんな北村　瑞希（男の俺）がブラジル行って北村　瑞希（女の俺）が転入してきたことに何の疑問も持っていない様子。何かちょっと寂しい。

でも今はそれどころじゃない…

「助けてくれぇぇぇぇ！！」

休み時間に入るなり俺はクラス全員（千早以外）に囲まれて彼氏いるの？だのなんか色々聞かれまくっている。

誰でもいい、助けてくれ！

千早は隣の席でニヤニヤしながらこっち見てるだけだし、頼む！だれかお助けぇぇ！

「ほらみんな！北村さん困ってるじゃない！その辺にしといたら？」
みんながその声にしぶしぶといった感じで自分の席に戻っていく。
ありがとう！えっと確か、中野　百合絵さん！だっけ？
「ありがとう。助かった」
「いいえー、私は中野　百合絵、よろしくね」
「オ…アタシの方こそよろしく」
あっぶねー俺って言う所だったよ。つーか、俺が男の時は限られた奴としか話すことなかったからな…これを機に色んな奴と仲良くなってみるか。

んで、今は昼休み。
千早と祐希と俺は屋上で昼飯を食べていた。屋上には三人だけ。ちょっと寒い。
俺は自信をなくしていた。
ひっきりなしに話しかけてくるクラスメイト達に愛想よく振る舞うのはすっごくしんどい…しまいにはクラスの違う奴らや学年の違う奴らまでくるし、もう無理。
溜め息をつきながら千早に聞いてみる。
「なんでみんな話しかけてくんだろ？」

「食欲の秋。つまりはそう言う事だ」

「なるほど」

コイツはたまに意味分からん事を言う。ホント意味分からん。だいたい今は１２月、冬だしね。

「祐希はどう思う？」

「そりゃ姉ちゃんがずば抜けて可愛いからだろ」

「男の時はずば抜けて格好良かったが誰も話しかけてこなかったぞ？」

「いや…知らないよ」

「……」「で？姉ちゃん、新しく友達は出来た？」

「中野　百合絵って奴とは仲良くなれそうな気がする」

「そうか、まぁ頑張れよ。お姉ちゃん？」

「わかったよ、弟君」

俺は昼飯である購買のメロンパンを食べ終わり、自販で買ったパックのいちごミルクを飲む。うまい。

両隣では早々に食べ終わった二人がタバコを吸っている。

俺も一服するかね…あれ？煙草ないしっ！？　どっかで落としたかなぁ？まぁいいや

「祐希、煙草ちょーだい！」

「ん？あぁ、はい」

「いや待て！俺は煙草吸う女は嫌だぞ！」

なんか千早が言い出したが無視して祐希に貰った煙草に火をつける。

「瑞希、煙草はやめなさい」

「だったらお前がまずやめろ」

横でスパスパ吸ってる千早に言われたくない

「馬鹿め、俺はもう百回以上禁煙に成功している」

「「駄目じゃんっ！！」」

俺と祐希がハモる。千早はやっぱり馬鹿だった。

そんな下らない会話を続けているうちに昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

俺たちは『チャイムが鳴っちゃいむ』などとわけわからん事を言っている千早をシカトしながらも教室へ向かう。

一年の祐希とは途中で別れて今は千早と二人、自分達の教室へ移動中。やたらと自分たちに向いてる視線が多い気がするが…ま、気のせいだろ。

教室に戻ると中野　百合絵が駆け寄ってきた。なんか心配そうな顔だ。

「どうかしたの？」

「昼休みは森下君といっしょだったの？」

「え？千早？うん、いっしょだったよ」

「何かされたりしてない！？」

「は？いや、何もないけど…？」

「そう、よかった…あの人達とはあんまり関わんないほうがいいわよ」

「？」

「顔はカッコ良いんだけどね、とんでもない不良なのよ。他校に普通に乗り込むし、喧嘩した相手は絶対病院送りだって聞くし、北村さんがくる前に問題になってたんだけど校長室にロケット花火撃ち込んだのも森下君達だって話よ？」

「……」

「今はブラジル行っちゃったけどいつもいっしょに行動してた北村瑞希って人も同じ位とんでもない不……って、そう言えば名前一緒ね」

「へ、へぇ！凄い偶然だね！わかった！気をつけるよ！」嫌な汗が出まくりである。千早はともかく俺もそんな風に思われてたのか…

「ほんと、凄い偶然ね」

「そ、そうだね」

……。

学校が終わり、帰り道の途中でその事を千早と祐希に話すと

「ほぼ事実だからどうしようもないよな」

という祐希の何気ない発言で俺と千早は精神に大ダメージを負った。

「千早、お前なんか目から汁出てんぞ」

「瑞希、お前も目から汁出てんぞ」

「千早！」

「瑞希！」

ガシッ

俺達は抱きあって友情を確認した。

「画になってるから困る…」

当の二人はそんな祐希の呟きも、周囲からの生暖かい視線にも気付いていなかった。

学校って行くまではタルいけど行ったら楽しいよね（後書き）

マヨラです。先の事をを考えてないにも程があります。どうしたらいいんですかね？

クリスマスとか無くなればいいのに

最近女であることに慣れてきた。
ある日いきなり女にされて、男には戻れないと聞かされて、それを受け入れ普通に生活している俺は、自分で言うのも何だが結構凄いと思う。

最初の頃は風呂入るの抵抗あったけど（裸だし）…今じゃもう見慣れたな

学校にも馴染めてきたと思うし…ちなみに中野　百合絵とはすごく仲良くなった。今じゃユリって呼ぶしあっちも俺を瑞希って呼ぶ、俺は自分の事を《アタシ》って言うのはやめた、めんどいもん。
女になってから携帯番号とアド教えたのはユリだけだったり。最近ユリは千早や祐希とも仲良くなって四人でツルむ事が増えた。悪いイメージは取り除けたらしい、いやぁよかった

で、まぁ今は千早ん家にみんないる。なんか知らんがみんなで下校中に千早がいきなり提案してきた、よくわからんけど話があるらしい

「で、話とはなんだね？千早君」

「今から話す…えー、オホン」

俺が聞くと千早は勿体ぶって咳払いする

「どうせたいした話じゃないと思うけど、千早だし…まぁ話してみてよ」

「祐希君、そんな言い方したら森下君が可哀想だよ？」

「うるせぇとにかく聞け、えーと、皆さん…なんと、もうすぐクリスマスです！」

「千早センセー！」

「はい瑞希君！」

「クリスマスはラブラブカップォが目障りです！」

「だよな！アイツらめっさうっとおしいな！」

「センセー！」

「なんだ？祐希君」

「何が言いたいんですか？」

「ふっ、知りてぇか？」

「「「いや、別に…」」」

「そんなに知りたいんなら教えて…って、え？…いや、聞いてくれよ。聞けよお前ら」

「教えて？森下君」

「よしよし、中野には話してやろう…後二人くらいならなーどうしてもって言うならー話してやらん事もないけどなー？」

（うざっ。すげーこっち見てるよ千早のやつ…どうする祐希？）

（話…聞いてやろうか）

「「俺たちも知りたいなー」」

「そうか！みんな知りてぇのか！んじゃ、発表するぞ…」

千早は心底楽しそうだ、さて、今年のクリスマスはどうなるんだろうか…

「今年のクリスマスは道行くカップル共にキムチを投げつけます！」

聞かなきゃよかった…千早以外はみんなそんな顔をしている。つーか、

「お前浦安読んだろ」

「そう、俺は春巻先生に学んだ」

「「「…却下だ馬鹿野郎」」」

「えー」

「えーじゃありません！ダメなものはダメです！だいたい…ガミガミ」

おぉ、ユリがお母さんモードだ。強ぇ。

千早は毎年クリスマスに訳わからんイタズラをしようとする、今までは俺と祐希でやめさせていたが、今年はユリがやめさせてくれそうだ

「わかった？森下君」

「はい、やめときます…」

ユリすげぇ…

「でも、なんかしたいわね。クリスマス」

ユリが言う

「キムチとかじゃなくて…」

「ユリ、友達とかと過ごしたりするんじゃないの？」

「そのつもりよ？瑞希達と過ごす予定」

「いやクラスの女の子達から誘われたりとかしてるんじゃない？」

「あぁ、それなら断ったわ。瑞希達と過ごしたかったから」

……嬉しい事言ってくれるじゃないの、つーかユリは俺が思ってる以上に凄いやつかもしれん、初めて喋ってから二週間ちょっと位しか経ってないのにこのグループに溶け込みまくってるし、元からい

たような気さえする

「どうかした瑞希？もしかしてダメだった？」

「あぁいや、そんなんじゃなくて…ユリは凄いなーって」

「そう？」

「そう」

俺達は二人笑いあった

完全に千早と祐希が置いてきぼりである

「なぁ祐希君」

「なにかな千早君？」

「二人ともかわいいな」

「落ち着け千早君、何故そんな今にも飛びつきそうな目で見ている」

「なんか抱きつきたい衝動にかられてね…ウズウズ」

「まぁヤニ補充して落ち着け」

「ん？そうだな」

スッ（煙草を取り出す音）

カチッカチッ（ライターの音）

ジジッ（煙草に火をつける音）

スゥー（煙を吸い込む音）

バガァァンッ（煙草が爆発する音）

ドサッ（千早が倒れる音）

ゲラゲラ（祐希が笑う音）

ムクリ（千早が起き上がる音）

ダッ（祐希が逃げ出す音）

ガッ（千早が祐希を捕まえる音）

デュクシッデュクシッ（マジで殺り合う音）

…（作者がこの後どうすればいいのかわからない音）

……。

ゴメンナサイ（作者が謝る音）

クリスマスとか無くなればいいのに（後書き）

読んで下さってありがとうございます！そしてゴメンナサイ。どうしていいのかわからなくなったんです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4495f/

オレアタシ

2010年11月10日10時46分発行